

## 大学人生活を終えるにあたって

山形 俊男（地球惑星科学専攻 教授）

九州大学に奉職後、母校に戻り、早くも20年余りの歳月が流れました。40年近い大学人生活を終えるにあたって、出会った人々の面影などが、早送りの映像のように流れ、感慨深いものがあります。

大学院に入学した頃には大気と海洋に共通の力学を研究する地球流体力学が世界で花開いていました。指導教員の吉田耕造先生は沿岸付近に冷水が湧昇する現象の研究で著名な方でしたが、この現象は回転成層流体が境界付近で外部からの応力にどう応答するかという、地球流体力学の典型的な課題で、とても興味をそそられました。赤道の存在はあたかも境界のような役割をしますので、沿岸湧昇は赤道湧昇とも強い相似性をもちます。東部太平洋で赤道湧昇が弱まるのがエルニーニョ現象です。こうした現象では、自転の効果と浮力がほどよくミックスしたケルビン波と自転効果の緯度変化による復元力で生じる惑星波が重要な役

割をします。私の研究では、この二種類の波動が常に陰に陽に現れることになりました。木星大赤斑など、時計回りの渦の長寿性を説明する中間地衡流力学、エルニーニョ現象の線形発生理論、海洋大循環モデルを用いたコスタリカドームなどの湧昇ドームの研究、インド洋のダイポールモード現象の発見、海流予測研究や気候予測研究など、すべての仕事に関わっています。吉田耕造先生との出会いは私の研究にとっても深い影響を与えていたのでした。

理学系研究科には優れた教員、学生、内外からのポストドク研究員との素晴らしい出会いがあります。加えて、私には海洋研究開発機構に内外から参集した研究者との交流も新しい発想や国際展開を促してくれました。ウッズホール海洋研究所やプリンストン大学などの海外の機関で出会った人々との交流が、若木が枝を伸ばすように、後輩にまで広がっていっ

など、大型プロジェクトの推進にも貢献されるとともに、大学教育を通じて多くの人材を育成されました。これらのご業績により、日本海洋学会賞、日本気象学会賞、米国気象学会スベルドラップ金賞など数多くの学術賞、および、紫綬褒章を受けられました。

山形先生は学内においても、この3年間、理学部長・理学系研究科長として部局運営を担ってこられました。大学機構改革の中、時代の流れに伴い変えるべきところは変えるが、真理追究という理学の魂は守り抜くという信念の下、数々の困難な状況を乗り切ってこられました。多忙なスケジュールのため、研究室メンバーと共有される時間は激減してしまいましたが、在外研究が転機となったというご自身のご体験を基に、国際的環境に



たことも、とても嬉しいものでした。

今、東京大学では国際化に向けて「秋入学」の議論が盛んです。理学には国や風土の違いがもたらす境界はありませんから、もともと国際的です。そういう理学者であっても、組織の違いや研究分野の違いで、心の中に境界を築いてしまっているかもしれません。理学者はその生き方においても革新的であるべきでしょう。それには強い「私」の確立が必要です。これを力説した福沢諭吉の「学問のすすめ」が、時を超えて心に響きます。

理学系研究科が革新的な未来を開拓し、いっそう輝きを増すことを期待して筆を擱くことといたします。

身を置くことの重要性、国内外研究者とのネットワーク構築の重要性を若手に強調されていました。現在、研究室を巣立った若手研究者の多くが海外で活躍しているのも、先生の推薦と激励の賜物です。

プライベートな山形先生はたいへん気さくなかたです。海外研究者のセミナーの後には、大学院生も交え、懇親会をよく開催されました。お酒の強さは無類で、盃が重なるにつれ、歴史や文学などへも話題が広がり、その話術に皆引き込まれてしまうのが常でした。カラオケもお好きで、興に乗られると最終電車の時間を過ぎてしまわれることも…。

4月以降は、気候予測の応用研究や海洋政策関係などのお仕事を続けられると伺っております。お身体に留意され、ますますご活躍されることを祈っております。

### 山形俊男先生を送る

日比谷 紀之（地球惑星科学専攻 教授）

山形先生は長年にわたり地球流体力学や気候力学の研究と教育に尽力されてきました。東京大学の大学院を中退して九州大学に助手として移られた頃は、地球流体力学に関わる数理的研究をされていましたが、プリンストン大学での在外研究を機に気候変動予測の研究へと興味の対象を広げられ、エルニーニョ現象の基礎理論の構築、また、東京大学に戻られた後は、インド洋ダイポールモード現象の発見・命名などをされました。さらに、地球フロンティア研究システムの設立や地球シミュレータの導入